

# 棚田学会通信

## 第40号 目次

特集 棚田と観光 (Ⅱ) .....	1
—千葉県鴨川市・大山千枚田—	
日本の棚田百選紹介 稲倉棚田 .....	8
官庁ニュース・事務局ニュース .....	9
会員通信 .....	10



写真提供：NPO 法人大山千枚田保存会

## 特集 棚田と観光 (Ⅱ)

—千葉県鴨川市・大山千枚田—

写真撮影：水田 稔



棚田のある中山間地の多くは、交通の便が必ずしも良いとは言えない地域に位置している。その意味では、一度にたくさんの観光客を呼び込むには不利な条件下にあると言ってよいだろう。では、棚田を抱える地域が、「観光」によってその将来を展望するためにはどうすればよいのだろうか。

人気のある観光地に共通していると思われるのは、観光客を飽きさせない様々な「仕掛け」が実にたくさん用意されていることではなかろうか。そのため、何度でも同じ場所を訪れるリピーターの存在が、観光地の人気を土台のところで支えている。リピーターを飽きさせないために、「仕掛け」の更新も重要だろうし、そのためには、あらゆるツテを頼って、新しい「仕掛け」を提供してくれる人たちとのネットワークも作っていかねばなるまい。

今回の特集は、そうした「仕掛け」のアイデアにあふれた千葉県鴨川市・大山千枚田の取り組みを紹介する。

## 中山間地域の活性化への挑戦

NPO 法人大山千枚田保存会理事長 石田 三示

### 中山間地域の活性化への挑戦

日本のどの地域でも同じ悩みを抱えているように、私たちの大山千枚田の周辺でも過疎高齢化の波は地域の大きな課題である。耕作不利地から放棄が進み高齢農家は耕作維持ができなくなっている。

そんな中、大山千枚田保存会の取り組みは、自分達の暮らす地域がどうしたら元気を取り戻していけるのか取り組んだ一例である。過疎、高齢化、耕作放棄地の増加は中山間地域の大きな問題であるが、それをまず受け入れることから始まった。耕作放棄地の多さは都市住民の田舎暮らしや耕地の借り受けにはいい条件である。また、手作業の多い棚田での農業は高齢者にしかできない技術でもある。オーナー制度はこういった負の要件を逆手に取った制度である。



三千本の松明が彩る大山千枚田棚田の夜祭り

### 取組前の状況

大山千枚田は南の嶺岡山系、北の清澄山系に挟まれた長狭平野の一番奥まった愛宕山のふもとに広がる3.2ha、375枚の棚田群である。嶺岡山系独特の蛇紋岩の風化した強粘土質により、雨水だけで耕作が続けられてきた。

また、この土質は「日本の米百選」にも選ばれている「長狭米」の食味の良さを支えている。江戸時代には寿司米として取引されていた記録もある。耕作する苦労はあるが、お米屋さんからの引き合いが多かったことから、なんとか耕作が維持されてきたものである。

しかし、地主さんも70過ぎの人がほとんどで後継者もなく高齢化からこのままでは数年で耕作放棄は進むと思われる。周辺の農家も不利な条件の農地から放棄が進み大山地区での転作面積は、他の地域と比べても特段多かった。

鴨川市は海辺に近づくほど平地が多く、基盤整備も進んでいたが、大山地区は山間の棚田が多く、また、地滑り地帯でもあり、基盤整備が特に遅れていた。大規模な整備はできないうえに高額な経費が負担できないからである。数少ない後継者のいる農家

も、お年寄りが水稻のほか酪農、花卉など細々と経営し、若い人はそのほとんどが勤めに出る兼業農家である。農業の維持のみならず、戸数も徐々に減少し、集落の維持さえも危うい状況にあった。

### リフレッシュビレッジ事業（農業構造改善事業）

そんな中、鴨川に藤本敏夫氏が移住した。彼は私達が価値として感じていない、小さな棚田や里山や、神社や農家の暮らしに価値を見出していた。彼がこの地域でこの財産を生かせる事業があると紹介したのが、リフレッシュビレッジ事業である。早速、集落の中で検討し、この事業を取り組みたいと、鴨川市に提案したのが始まりである。当時の鴨川市は海岸地域で大きな事業を展開しており、農村部での取り組みを模索していた。本多前鴨川市長は大変乗り気で、旧長狭町をその範囲として事業提案をし、採択された。当時の我々の思惑とは少しかけ離れたものだったが、大きく動き出す可能性を感じて心が浮き立つ思いだった。またこの事業を担当した当時の渡辺係長も積極的に取り組んでくれた。

当時、都市農村交流など、農業専門家には疑問視されていたが、彼（藤本氏）は、農業は全くの素人であった為、新しい発想ができ、幸運でもあった。

早速、旧長狭町の範囲でリフレッシュビレッジ推進協議会が設立され、協議が始まった。協議の中で当初の計画にはなかったが、小さな直売所を運営していた地域から道の駅のような直売のできる施設の提案があり、鴨川市総合交流ターミナル「みんなみの里」として設置がされた。この施設は三セクで経営の提案もあったが、当初からの民間主導のもとで地域住民の力で現在でも盛況に経営されている。

大山千枚田の事業計画は単純な施設の建設とは違い、検討することや準備期間もあり、当初の企画よりも大幅に遅れ、予算も規模も縮小した。しかし、その分十分な時間もとれ、出発に当たっては身の丈に合った施設となった。

「みんなみの里」も「棚田倶楽部」も海岸地域での2事業に比べればはるか予算規模の少ない事業であるが地域の活性化や鴨川の広報には大きな成果となっている。

### 大山千枚田保存会の設立

旧長狭町の大山、吉尾、主基の三地区に地区部会が作られることとなり大山地区には大山地区部会が作られ、地域で活動している人たちが招集されて話し合いを持った。しかし、当時、都市住民との関わりをもつ取り組みに、皆初めは懐疑的であった。しかし、何度も会議を進める中で、大山地区から三か所の事業提案があった。

そのころすでに、棚田に、カメラマンも集まり始めていた大山千枚田周辺と、その少し下の平塚地区の棚田と、大田代集落での事業提案である。全部進める案もあったが、予算の関係で最終的に、大山千枚田一ヶ所に落ち着き、今の大山千枚田がある。こ

こも当時は「小金の千枚田」と呼ばれていたが、これを機に大山地域全体で取り組むという意味も込め、旧大山村の名前から「大山千枚田」とした。

これを進めるにあたっては、多い時には週二回ほどの会議を持った。もともと大山集落はまとまりのよい地域ではあったが、1つの事業を進めるにあたってこれほど頻繁に会議を持った事はない。そのことは以後の事業展開にも大きな力となっている。

大山千枚田に決まったところで地区部会は任意団体の大山千枚田保存会へと移行し、具体的な活動に入る。

まず、一部耕作放棄地の複田である。手始めに現在の棚田倶楽部真下の10年ほど放棄された田んぼから始めた。最終的には周辺も含め140アールの複田をした。ここは土坡の棚田なので重機を使い、石積みの棚田よりも容易に複田できた。また、草刈りの管理を簡便にする為、グランドカバープランツの植栽試験も行った。

千枚田の地権者10名中8名は自分で耕作をしていた。そう長くは続けられないにしろ、まだ耕作している田んぼを借り上げてのオーナー制度であった為、地主さん達の理解が必要だった。当時の地主さん達は、貸した田んぼが将来どうなるのか、都会の者が来て田んぼなどできるものかと、タカをくくってあまり乗り気ではなかった。

農業体験が企画され、棚田ネットや劇団ふるさときゃらばんの皆さんの協力で、交流が始まり徐々に理解が深まっていった。都会の人の農作業はプロから見ればおぼつかないものであるが、彼らの棚田保全の思いやお年寄りたちへの一つ一つの農作業への賛美は、地主さん達の心を解きほぐしていくには充分であった。

保存会の事業規模も年々拡大し、社会的にも責任を持ち経営していくために、平成15年にNPO法人化した。法人化したために施設の指定管理の受託や補助金等の申請もできるようになり、より活動の幅が広がった。ボランティア頼みの活動にはおのずと限界がある。地域課題は山積しており、課題解決を仕事としてどう成り立たせるかが重要なポイントとなる。活動の拡大に伴い関わる人員の確保も行った。また、当時から取り組んでいる人たちは高齢者が中心であり、周囲からは何年もつのだらうかと陰口も聞こえていたが、私は継続の可能性を信じていた。団塊の世代は次々に定年を迎え、その人たちにこの活動に参加してもらえるのが課題である。今では設立当時の人はほとんどいなく、新しい人たちが運営している。平均年齢は当時よりも若返っているかもしれない。

大山千枚田保存会では都市住民の協力もあり事業も規模拡大ができ、活動の中で地域に移住者も増え、その移住者が保存会活動に参加してきている。

#### 棚田オーナー制度の運営

当時、棚田がそれほど価値があり、保全すべきも

のであるなどは、ほとんどの人が思っていなかった。都会の人がどれほど棚田や米作りに関心を持ち、オーナーとして参加するのか半信半疑であった。このころ棚田に吹く風が少しずつ変わってきた。

平成10年に鴨川で棚田シンポジウムを開催し、地元でも棚田の活動に力が入り、棚田オーナー制度の可能性を検討してきた。棚田ネットや劇団ふるさときゃらばんの皆さんの2年間の農作業体験参加で、都市住民との関わりも理解が深まり、ようやく11年に募集の運びとなった。棚田オーナー制度は、高知県梶原ですでに始まっており、これを参考に、鴨川版を検討した。

この年、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定され、また東京三越デパートでの「棚田パノラマ体験展」に参加した。大都会東京の中心で棚田がどう評価されるのか不安はあったが、大山千枚田は「東京に一番近い棚田」として参加者には一番人気があり、好評さに、取組に一層力が入った。9月にはみんなみの里での写真展「大山千枚田の四季」を開催し、棚田の知名度アップやオーナー制度の広報に努めた。

関係者の努力の甲斐もあり、173名の応募者があり12年度のオーナーとして39組が決定された。予想以上の反響に取り組みに弾みがつき、大きな一歩を踏み出したことは確かである。平成13年はオーナー数を112口に増やしての運営になった。大幅な規模の拡大ではあったが順調に運営することができ次年度には136組まで拡大した。

平成14年には棚田特区として第一号の認定を受け鴨川市の六つの集落でも棚田オーナーの受け入れを始めた。その事務局を担当し、募集から運営まで関わっている。

棚田オーナー制度は、都市と農村の思いがマッチした事業である。中山間地域では農業者の高齢化が進み、耕作が困難な農地が増え、それを何とか守っていききたい。都市住民にとっては、安全な食の確保や、できれば自分で作ってみたい、子供にも体験させたい。思いが共有できたのである。中山間地域での課題は、切り口を変えることで、都市の課題解決になることを知った。このことは、次の事業展開に向けて大きな礎となった。

オーナー主体のオーナー会も結成され、保存会と充実したオーナー制度を運営することができた。大山千枚田保存会では、設立当初から都市住民の参加を促し、平成12年度には三号会員として100名を超える方が登録し、棚田保全に関わっている。地域住民だけでは解決できないことも、いろいろなスキルや情報やネットワークを持



綿藍トラストの糸紬

つ都市住民とともに活動することにより、解決できると信じている。保存会が取り組んできた各種のオーナー制度も、都市住民の皆さんの意見を生かしながら開設したものである。

保存会とオーナーさん達の信頼関係も厚く、いまだに初期のメンバーが継続されていることもありがたいことである。

### 全国棚田（千枚田）サミットの開催

保存会では、全国棚田（千枚田）サミットに、第3回更埴市（現長野県千曲市）のサミットから毎年参加している。全国の棚田の規模に圧倒されながらも、次第に鴨川でも開催の機運が高まった。

鴨川は都市に近い棚田の利点を生かし、鴨川ならではの企画を検討した。ここでも都市

住民を中心に「サミット応援団の会」が結成され企画の段階から関わった。このことは大山千枚田保存会がいかにか都市住民との関わりの中で成り立っているかを内外に知らしめることとなった。

また、サミット史上初めての10の分科会を設け、それぞれの専門家にコーディネーターをお願いし、千人近い参加者があった。分科会は、「オーナー制度の運営と棚田」「地域づくりと棚田」「米流通と棚田米」「環境教育と棚田」「生物多様性と棚田」「ボランティアと棚田」「棚田の圃場整備」「田舎暮らしの現実と課題」「棚田景観の保全と活用」「日本農業の再生と棚田」と中山間地域における多岐にわたる課題がテーマとなった。大山千枚田のスタッフは運営には関わらず、すべての分科会に参加し全国の仲間と意見交換した。

また、サミット期間を三日間とし最終日は「棚田フェスタ 2002」を黄金色に輝く大山千枚田で開催し、「棚田に捧げるフラカヒコ」や棚田で生まれた「里舞」が初披露された。「里舞」は棚田で生まれた舞踊としてその後もレパトリーを増やし各地で公演活動しており近々東京での公演も企画している。

また、保存会では大学生との交流も積極的に進めており、オーナー制度開設当初からの法政や早稲田、農工大の学生たちを中



### 当日配布のサミットプログラム

心にした「棚田環境大学」も開催され学生たちの棚田への関心も高まった。これも何年か継続されたが東京の学生が地方に出向くことの難しさから途切れた。平成19年に大山千枚田大学対抗泥んこパレーとして「棚田環境大学」を復活させ、今では関東圏12大学が参加するイベントとして継続している。農業や農村を知らずに育った今の大学生と棚田保全や農業の大切さを議論するいい機会となっている。

鴨川サミットは、多種多様な参加者、延べ3000人を数え、その報告書は100ページに及んだ。

### 各種オーナー制度の開発

保存会は棚田オーナー制度の運営が基本であるが、そのときどきに生まれる課題に取り組んできた。平成13年には20年来放棄されてきた田んぼを、生協の協力を得て復田した。復田してもすぐには田んぼとしての利用は難しく、畑として使うことを考えた。

当時他の地域で始まっていた大豆を栽培し、味噌加工まで取り組む「大豆畑トラスト」を企画した。大豆の種まきから草取り収穫まで体験し、棚田で収穫したお米を使って麴から手作りする本格的な味噌作りである。

また、次の年には、千枚田周辺で一枚の田んぼが個人のオーナーでは受けにくい広い田んぼを復田し、共同で作業し収穫されたお米を参加口数で分配する「棚田トラスト」を開設した。これは、マイ田んぼである大山千枚田棚田オーナーと違って、参加者同志の交流も図られ、初心者には参加し易さから毎年70口くらいの参加がある。これは運営するサイドにとっても参加者との交流も図りやすく各作業日や作業時間も特定され関わる保存会の人員も最小限で済む。

次に企画したのは「酒造りオーナー制度」である。コシヒカリの栽培は期間が限定される。千葉県で開発された早生の酒米「総の米」を使い、田植えの時期を早め期間を長くすることができ、また、地域の酒蔵とも共同の取り組みができた。これも酒好きのオーナーさんからの提案で、永く温めていた企画が動き出すことになったものである。広報も順調にいき、初年度は予想を大きく超える240名の参加があった。

オーナーさんの「オーガニックコットンが欲しい」



大豆畑トラストの味噌作り



家づくり塾の様子

という話から企画したのが、空いた畑を使い、綿と藍を育て、糸紡ぎ、織り、藍染めをする「綿藍トラスト」である。田んぼの作業の合間を縫って実施している。昔は家族の着るものを莫大な時間をかけて夜なべで糸紡ぎし、その糸で一着の着物を織りあげていたのである。今は人件費が高く手間のかかる作業はうとまれるが、これこそ自然と一体の暮らしである。参加者の中には自分で糸を藍染めし自分の衣類を織り上げた人もいる。

また、大山千枚田の南側の嶺岡山系は植林がされ、遠目には豊かな森であるかのように見えるが、間伐されずに放置されて価値のない山となっている。日本の森の再生と日本古来の建築技術を継承しようと始めたのが、古民家の再生を通して大工仕事や日本の森や住宅について学ぶ「家づくり体験塾」である。これも、オーナーさん達から「古民家を探してほしい」と依頼を受けたことがひとつのきっかけである。国産材を使い、日本独自の軸組み工法で、壁は竹子舞で土壁を塗っている。

百年以上たった古民家がまだ健在であることから、国産材と軸組み工法の日本建築の素晴らしさは、次世代に伝えなければならないものである。

家づくり体験塾は今までとは違って、自分達の持たない技術や知識が必要で、プロジェクトチームを作り、製材業者や建築家との共同の取り組みとした。年間に10回の一泊二日の座学と、実技の講座が開かれている。

ほぼ毎年、新たなオーナー制度の提案をしてきた。

### 体験活動の実施

棚田を使い、子どもから大人までの農業体験は、設立当初から実施してきた。

千枚田は用水路を持たない棚田であり、非常に水持ちの良い土質である。そのことは、降った雨がいつも田んぼに水がある環境で、独特の生態系を持つ。その環境を生かし、「自然観察会」を実施している。

また地域の文化を体験するわら細工などのクラフトや祭りずしなどの食の体験にも力を入れている。現在では小中合わせ80校ほどの受け入れをしている。

また、周辺の里山をフィールドに山賊体験など昔の遊びを通して環境教育を進めている。何の変哲もない里山だが、そのなかに多くの宝物がありそれを生かし私たちが次世代に伝える大切なものがある。今、保存会の活動の重要な位置づけとなっている。

### 大山千枚田農家レストラン構想

現在、保存会では農家レストランが検討されている。平成9年に鴨川市が事業採択し取り組んだリフレッシュビレッジ事業の構想には、千枚田周辺に、体験棟、レストラン、宿泊施設を作る計画があった。計画の一つである宿泊施設は、当初から大山青少年研修センターを将来改修し利用するという計画であったが、計画が煮詰まる中で予算の規模も縮小し頓挫した。その後も教育委員会の管理下で運営され

ていたが、改修も進まず、安全の確保ができないということで、一時閉鎖されていた。そこで、篤志家の援助で大改修の末、保存会が指定管理を受け、曲がりなりにも確保できた。これは、日帰り体験が主体であったものを、宿泊を伴う活動として企画できる大きな力となっている。

当初の計画で残っているのはレストランである。

保存会は、オーナー制度を中心に、米作りの大変さや大切さを体験の中で伝えてきた。最近ではその活動も農業だけではなく、農村における課題や、資源を生かした取り組みに広がりを見せている。いま、大山千枚田にはそこに参加する多くの会員や、観光客がおとずれる。その多くは、休憩時にゆっくりと棚田の景観を望みながら、お茶や軽食を希望する。そのニーズに応え、地域の食文化を伝えるためにも、農家レストランは必要不可欠な存在であり、保存会としての悲願でもあった。

普段の生活の中に溶け込んで見えなくなっていたり、食文化のグローバル化により消えようとしている、日本の地方独特の食文化がある。そこでひとが何代も地域の食を食して、嘗々と暮らして来た歴史があるからである。季節違いのものや、遠くから運んでこられるようになったのは、それほど古いことではない。季節ごとに、その土地で収穫された食材で、その土地ならではの調理方法での食べ物である。それこそがその地を訪れた人の求めるものであり、提供されるべきものである。

私たちが、大山千枚田で活動をするうえで、食事を提供するとすれば、南房総の農家の座敷で、南房総独特の農家に伝わる食事を、提供することが求められる。大山千枚田ならではの食事である。地域の食材を使い、地域の調理方法で提供するのであるから、調理は農家のお母さんたちがすることになる。また、食材は棚田周辺の畑で確保し、できる限りそれを利用していく。

考えてみれば私たちの活動の原点は、耕作放棄地と高齢化と、農家の空き家だった。材料を提供する畑や田んぼはいくらでもある。それを作る技術も、お年寄りたちがもっている。また、それを調理する技も持ち合わせている。今度はそれを提供する場も確保できた。地域の大きな資源である。これをどう生かしていくのかなのだ。実際に調理、接客するための研修、提供する料理の内容、営業に向けた広報など、まだまだ解決する課題が多いが、実現に向けて解決していかなければならない。



自然観察会の子供たち

## 地域と行政の連携・役割分担

元鴨川市農林水産課長 渡辺 寿雄  
(平成7年度から18年度まで担当)

大山千枚田での取組みはオーナー制度をはじめ棚田の核とした都市農村交流の成功事例として広く知られています。

このことは交流の担い手である千枚田保存会の地域活性化への熱意と、その手腕によるところが全てですが、行政の立場からみますと、首都圏という地理的優位性のほか、次の事柄をあげることが出来ます。

1. 事業が動き出した平成8～12年は、鴨川市総合交流ターミナル「みんなみの里」や鴨川市地域資源総合管理施設「棚田倶楽部」といったインフラ整備への予算化が容易であった。
2. 平成11年度に創設された中山間地域等直接支払い制度の交付金が、保存会組織の強化を図る上で効果的に作用した。
3. 当時、棚田オーナー制度(市民農園)は特定農地貸付法によるため開設主体は鴨川市です。このことで地域内の合意形成や応募者からの信頼を得ることができた。
4. 平成15年4月鴨川サミット後に提案した鴨川市棚田農業特区が特区第一号として認定を受けたことにより、メディアの報道もあり追い風となった。等々、時宜に恵まれたと思います。

しかし、これらは結果であり、本当はもっと良い方策があったかもしれません……。

最後に、大山千枚田保存会の歴代会長は地権者からではなく地元支援者の中から選ばれています。平成12年度にスタートし14年目を迎えた棚田オーナー制度、故人となられた方もいらっしゃいますが運営体制は盤石です。

## 大山千枚田を現代舞踊“里舞”発祥の地に

—千枚田オーナーから一転・移住して—

NPO法人 大山千枚田保存会 理事  
NPO法人 鴨川現代バレエ団 理事長  
長村 順子

東京で演劇やダンスの仕事をしていた私は、2000年に大山千枚田保存会の棚田オーナー1期生として鴨川へ移住し稲作を学びはじめた。2002年全国棚田サミットが鴨川で開催されることになり、そのステージで「棚田版さきこいソーラン」のような踊りを創りませんか?と保存会理事長の石田氏からお話があった……それが、私のライフワークとなった「里舞」の始まりである。



写真撮影：水田 稔

大山千枚田は、嶺岡山という千葉県最高峰の愛宕山の麓に広がっている棚田群の一つである。最高峰といっても408m、なだらかな丘陵線とそこに広がる棚田の曲線は、自然と人の営みが長い長い時間を経てもたらしたもので、それはモーツァルトの音楽のように奇跡的で、グレンゲールドの弾くバッハの平均律のように美しい。

わたしは、日本中どこにでもあるという「里」というフィールドが内包している豊かな力とその世界が、汲み尽くせず今、まだここにあるのだということに気付き、一方、今まさにその奇跡のような宝をわたしたちの社会は積極的に失おうとしていることに愕然とした。

この十年「里舞」を創り、踊ってきたことで知った「里にいる幸福」と、「里を失うこと不幸」を、一つの舞台作品として創り出し、都会的な世界に憧れを持つバレエスタジオの生徒たちにそれを踊ることの意味を伝え、そして、できるだけ多くの人に観てもらおうことを目指して、今、都会の大劇場での公演を打つことを計画している。実現することができるのかどうか、それが成功するのかどうか、皆目わからないのであるが、一歩ずつ進むしかないのである。先人達が、一振り一振り、鍬を振り落としてきたように。それがわたしの役目であると思っている。



大山千枚田で里舞を踊る筆者

写真撮影：水田 稔

大山千枚田の生き物観察会

NPO 法人大山千枚田保存会事務局長 浅田 大輔



- 感想第1位 「ヤバい。虫が超いっぱいいる」
- 感想第2位 「カエルって可愛くてプニプニで気持ちいい」
- 感想第3位 藪化した放棄水田を見せた後に「えっ!!」と驚く。

これは観察会に来てくれた子供たちから良く聞く感想です。

大山千枚田の取り組みの一つに自然観察会があります。棚田に生息する生き物について興味を持ってもらうだけでなく、農家の暮らしと生き物の繋がりを伝えたいと思って企画しています。地元の農家さんにもスタッフとして参加してもらっています。

最近、農家さんと話をして気付いたこと。それは関わってくれている農家さんが、サンショウウオやアマガエル卵について普通に話をしていることです。今までは特にカエルの卵があるくらいにしか思っていなかった人たちが「うちにも沢山サンショウウオの卵があった」という話を、作業中に話すようになりました。

大山千枚田だけでなく、鴨川の田んぼには、全国的に希少となった生き物が沢山生息しています。それは鴨川だけでなく、全国の棚田に言えることです。農家さんが自分の田んぼに生息している生き物について、興味を持って、それらについて語ることができれば最強だと思っています。いつも観察会では、農家さんもスタッフとして参加してもらっています。

田んぼの生き物と、生活の場として営んでいる田んぼの繋がりを参加者に伝えるためには、参考書に書いてある話をするより、農家さんが色々な話をしてくれる方が効果が高いと思います。

今後は鴨川市内だけでなく、南房総全体の農家さんを巻き込んで、農村の生物の豊かさを伝える活動を行っていきたいと思っています。

大山千枚田・環境大学を主催して

酒井 悠里 (学生NPO 農楽塾 OG)

今年で(恐らく)7回目を迎える「棚田環境大学 全日本大学対抗泥んこバレーボール大会」。本イベントは「大学生による大山千枚田を中心とした鴨川地域の活性化」を目的としており、毎年10校ほどの首都圏の大学の学生が集う。1泊2日のスケジュールで、1日目に講演会やワークショップ、フィールドワーク、2日目に大山千枚田の1枚にネットを張っての大学対抗「泥んこバレー」が開催される。

私は4年前にこのイベントの実行委員長を務めたのだが、今でも時折思い出すことが一つある。地元の方との打ち合わせのため、ふもとのバス停から棚田頂上までの道を上っていると、道路の脇に甘夏の樹が数本目に入った。黄色く熟れて、今が食べごろ!という実がゴロゴロ付いている。おいしそうだな...と思う反面、「なぜ誰も採って食べないのだろう」と考えながら歩を進めた。地元の方によくよく聞けば、管理する人がいないからそのままなのだそう。なんとももったいなく感じた。

そしてむかえたイベント当日。1日目のフィールドワークは、民族研究家の結城登美雄さんが提唱する「あるもの探し」にならったもの。グループに分かれ、地元の方の案内で千枚田周辺を徒歩でめぐり、学生が「地域の魅力だ」と感じたものを撮影し、その写真を共有するというかたちで進んだ。

写真共有の時に、ある学生から「採られずそのままになっている甘夏をいかしたフルーツのお菓子をつくりたい」という意見が出た時、ふと思った。あの甘夏はあのままでは「管理放棄された果樹」で終わってしまう。でも管理・収穫できる人がいれば、さらにおいしく加工・調理できる人がいたら、甘夏は大きな価値をもつ。地域の資源は、価値を見出し生かす人がいてはじめて意味がつくられていくんだな、と当たり前ではあるのだが実感させられた出来事だった。この一日で鴨川という地域が変わったわけでは決してない。地域との付き合いの継続性のなさは大きな課題ではあるが、今後も学生によって地域に新しい視点を、少しでも持ち込めたらと思う。



写真提供：大山千枚田保存会

## 日本の棚田百選紹介

信州上田のグリーンツーリズム拠点として  
飛躍する稲倉棚田

稲倉棚田保全委員会（上田市農政課）

「星空に ゆれるホタルの火が映える  
稲倉棚田の人里づくり」

これは、稲倉棚田を中心とする上田市豊殿地区の  
振興テーマだ。

「日本のまん中 人がまん中 生活快適都市」～水  
跳ね 緑かがやき 空 ところ 晴れわたるまち～を  
目指している上田市において、清流と豊かな緑、澄  
んだ空気と幻想的な蛍、星空といった多くの癒しの  
イメージを秘めた人里づくりに取り組んでいる。



はげかけ風景

稲倉棚田は長野県上田市の北東部に位置しており、市街地からは、その姿がポン・デュ・ガールの様な古代ローマの水道橋を連想させる国内最大級の橋梁である「ローマン橋」の奥に見ることができる。ローマン橋をはさんで圃場整備の進んだ平野部の水田と、いびつな棚田とが対照的だ。元禄時代（江戸時代）から明治時代にかけて開田されたものと言われており、土手は石と土との巧みな調和により造られ、稲倉川（行沢川）沿いに延長2.5km、標高差260mにわたり山裾から谷あいに登りながら大小様々な形状で広がる稲倉棚田は、面積的には国内最大級の棚田であろう。

平成11年7月26日にその景観の美しさから推薦され「日本の棚田百選」に認定されて以来、棚田保全の機運が高まり、平成15年9月に、地元殿城地区に加え豊里地区の住民や農業協同組合、行政などで構成される「稲倉棚田保全委員会」が発足するに至った。殿城と豊里地区を合わせた“オール豊殿”の陣容での保全活動である。

稲倉棚田保全委員会では、この稲倉棚田の自然景観の保持と環境保全を推進するため、棚田での米作りのほか、都市部の中学校・高等学校からの農業体験学習を受け入れたり、棚田オーナー制度を実施し



ほたる火まつり

たり、棚田の景観を利用した「ほたる火まつり」や「案山子まつり」などのイベントといったさまざまな活動を行っている。

そんな中、平成23年度に採択となった長野県の中山間総合整備事業により、稲倉棚田を中心に13億円ものお金が水路や農道の整備改修、交流施設の建設に投入されることとなった。この事業により稲倉棚田に管理施設が建設される予定で、農業機械の保管等、棚田における農業負担の軽減を図るとともに、農業体験学習の受け入れや棚田オーナー制度をより充実したものへと発展させていくための交流拠点としていきたいと考えている。

平成25年度秋の着工を目標に、現在設計を詰めている段階だ。公園のトイレのような位置づけであるため大きな施設ではないし、そこでレストランをやるような設備を入れられるわけでもないが、野菜や棚田米の直売はできるのではないかと期待を寄せている。地元の管理負担を考えトイレは少ない方がいいのではないかとか、訪れた観光客の利便性を考えて多めにトイレを配備しようかなど、また、クリーンエネルギーとして太陽光発電の利活用や棚田としての景観を損なわないような配慮など、さまざまな意見を出し合いながら棚田の将来に想いを馳せている。

また、首都圏を中心に農村景観の保全意識が高まりつつあるようで、景観保全や保全活動そのものを支援することを目的としたツアーなども企画されており、稲倉棚田もその候補に挙がっているようである。

水路や農道の整備、管理施設建設といった保全環境の整備によりツアー目的地として選ばれる魅力ある人里づくりが進めば、地元住民の実利にもつながり、地元住民の保全意識も高まる。そうすれば、より一層地元の魅力を活かしたおもてなしをしようという機運も醸成され、それがまた魅力ある農村を形作り選ばれる目的地となっていくであろう。そうしたスパイラルアップのきっかけとなる本事業の進捗には今後も期待をするばかりである。

稲倉棚田の人里づくりに乞うご期待！



案山子まつり 写真提供：上田市



## 官庁ニュース

### 美しい棚田の保全に向けて（前編）

農林水産省 中山間地域振興課 柴田 亮

『日本は瑞穂の国です。息を飲むほど美しい棚田の風景、伝統ある文化。若者たちが、こうした美しい故郷を守り、未来に希望を持てる強い農業を創ってまいります。』

近年、棚田に関わる多くの皆様のご尽力により、棚田に対する関心が広がっています。棚田を含む佐渡や能登地域の GIAHS への認定、蔵野や山都町を皮切りに重要文化的景観に選定された棚田の広がり、景観法に基づく景観農業振興地域整備計画を策定する動き、そして、安倍総理は施政方針演説でこのように述べ、棚田をはじめとする日本の美しい風景、美しいふるさとを守るためにも、農村における農業生産活動の維持が重要であることに言及されました。

一方、棚田はもちろん中山間地域では、過疎化・高齢化が進み、農業生産活動を維持するためには担い手の確保等の取り組みが待ったなしの状況です。

当課では、先日、関係の皆様のご協力を頂きながら、全国の約 10 地域の棚田について調査を行いました。オーナー制度やトラスト制度、大学や企業との連携などの都市農村交流の視点、棚田米のブランド化など販売・加工促進の視点、棚田を核とした観光振興の視点、これらの視点を組み合わせ、各地域が試行錯誤を繰り返しながら多様な活動を展開し、一定の成果を得ている例が多数あります。

必要となるのは、必要最小限の基盤整備、行政（市町村あるいは県）の積極的な関与と支援、そして、何より大切なことは、NPO 法人の設立を含む地域の体制づくりです。

農林水産省では、こうした取り組みを後押しするため、棚田地域の活動のきっかけづくりを目指して平成 11 年に「日本の棚田百選」を認定し、その前後から棚田基金をはじめとする様々な事業制度を整備してきました。農村振興局では、ハード・ソフトを含めて広範に利用可能な事業メニューを取りそろえており、地域の熱意と、それを支える市町村あるいは県の積極的な関与が伴えば、多様な取り組みに寄与できると考えています。

こうした活動を継続し、または、新たに動き出すためにはたいへんなエネルギーが必要になりますが、美しい棚田と農村の風景を「地域の宝」ととらえ、地域と行政が一体となって挑戦する取り組みに対して、農林水産省としても可能な限りの支援を続けていかなければならないと考えています。次回、機会を頂ければ、平成 25 年度新規事業を含め、棚田保全にも活用できる農村振興局の施策についてご紹介したいと考えています。

**お便り** 長崎県の豊里と申します。私は第 14 回全国棚田（千枚田）サミットに県担当として関わり棚田の美しさ、そこで生活を営んでいる人の苦勞と努力する姿に魅せられ、棚田への思いを強くしたのが私の棚田との出会いであったと思います。その後、勤務により、棚田とは疎遠となっていましたが、この度の異動により島原振興局勤務となり、再び棚田の担当となった次第です。島原は、岳（清水）棚田、谷水棚田など日本の棚田百選に選定された地区を管轄しているほか、県内有数の畑作地帯であることから「長崎県のだんだん畑十選」に 3 地区が認定されている状況です。このだんだん畑十選には本庁担当として認定作業に関わった経緯もあり、その後の地域振興をどの様に進めるのか大変気になっていたところでした。今回、再び棚田担当となったことから、今後棚田・だんだん畑地域をどの様にしていくのか地域の人と共に考え、微力ではありますが努力していきたくと考えています。棚田学会の会員の皆様の学会通信等への情報提供等も参考にさせて頂きたいと考えています。今後ともよろしくお祈りします。

長崎県 豊里 和徳

## 事務局ニュース

### ■ 2013（平成 25）年度棚田学会大会のお知らせ

日時：2013 年 8 月 2 日（金） 11：00～

場所：三越劇場（日本橋三越本店 6 階）

第 1 部 ◆総会 ◆棚田学会賞授賞式典

第 2 部 ◆大会シンポジウム「棚田と観光」

報告者：高木宏明・劉 鶴烈・山路永司・山下博之・菊池真純・（コーディネーター）千賀裕太郎

第 3 部 ◆懇親会 特別食堂「不二の間」

（日本橋三越本店 7 階）

### ■ 評議員立候補の受付

昨年の総会における規約の改正により、評議員を選出することになりました。つきましては、会員の方で評議員に立候補を希望する方は、棚田および棚田学会への思いを 400 字程度で記して、E-mail、FAX、郵送にて、平成 25 年 7 月 15 日までに事務局へお申し出下さい。

### ■ 論文・事例研究・報告等の投稿を募集

学会誌「棚田学会誌—日本の原風景・棚田—」は、棚田に関する学術研究のみならず、広く多くの会員から興味を持たれる情報、意見等の投稿を募集します。これらを掲載することにより、会員同士の連帯を育むためのプラットフォームとしての役割を担うことを目的とします。年 1 回、毎年 7 月の発行です。お問合せは事務局へ。

### ■ 「お便り」募集

会員の皆様からのお便りをお待ちしております。お工作上的の出来事、地域の出来事、プライベート etc. 何でも結構です。200 字程度にまとめて、事務局までお送り下さい。なお、「お便り」は随時受け付けております。

### ■ 編集後記

この連休中、大山千枚田に家族で田植えに行きました。天気も良く、子供たちと千枚田の自然や風景を満喫することができました。

今回の特集は「棚田と観光」の第 2 弾ということで、大山千枚田をとりあげました。棚田を観光資源として位置づけ、棚田地域の活性化を目指すことは大切なことです。一方、観光地化していくということは、棚田のことを何も知らない人々を受け入れていくことでもあります。中には我々から見て常識に欠ける人もいることでしょう。ただ、様々な懸念はあれども、棚田地域を元気にしていくため、観光地化を検討していくことは避けられない流れだと思います。どのような形で棚田と観光を結びつけ、棚田保全にかかわる人たちが納得する形で観光地化を模索していくのか。その議論を深めていく場として、本通信を活用いただければ幸いです。

（田中卓二）

## 会員通信

### 堰浚いボランティアと棚田保全

—会津山都地域における試み—

本木・早稲谷堰と里山を守る会事務局 大友 治

東北地方には「千枚田」と呼ぶにふさわしいような壮大な棚田はあまり見られません（「棚田百選」に選ばれたのは3ヶ所のみ）。それは冷害が起きやすいきびしい気候条件→経済的効率の極端な悪さ→減反政策開始後に真っ先に耕作放棄の対象となった、という連鎖的事情によるところも大きいのですが、東北地方の中山間地域に特有の地形にも起因しています。三陸のリアス式海岸にもその一端が見られますが、標高はそれほど高くないにもかかわらず、深く狭い谷と、棚田さえなかなか作れないほど急峻な斜面が複雑に入り組んでいるのです。実際、少し山間に入れば到る所に棚田を見ることができそうですが、たいてい一群ごとの規模は小さく、大きな谷や尾根を間にはさんで点在しています。福島県喜多方市の北西部、飯豊連峰の麓にはそのような東北の棚田の典型的な景観が見られ、私たちが保全活動をおこなっている喜多方市山都町本木・早稲谷地区の棚田もそのひとつです。

早稲谷川右岸の尾根沿いの条件のよいところに棚田が点在し、それらを本木上堰という全長6kmを越える一本の山腹水路が結んでいます（東北地方では農用水路を堰と呼ぶことが多い）。棚田を中核としてそれを取り囲む豊かな森、早稲谷川の急流と堰の穏やかで清冽な流れ、そこに育まれる多種多様な動植物、昔ながらの大屋根の民家、それらが渾然一体となった里山の姿は、まさに“ふるさと”と呼ぶにふさわしい魅力にあふれています。私たちは景観としての棚田だけではなくこのような棚田を最重要契機とした生活空間としての、風土としての里山全体を守りたいと願い活動しています。

そのために春の堰浚いを都市住民にボランティアでお手伝いしていただくという取り組みを2000年から続けています。田植えや草取りや稲刈などの一般的な農作業ではなく、堰の維持にボランティアの支援を仰いでいるのは次のような理由からです。田んぼは大量の水を必要とします。その水を供給しているのが堰であり、堰が壊れればその堰につながるすべての棚田が同時に耕作不能になってしまいます。堰は棚田の生命



新緑の本木上堰

線なのです。しかし雪国では冬の間大量の落葉や土砂の流入、倒木、土手の決壊などで堰は甚大な被害を受けるので、毎年春にはそのままでは水を流せない状態になってしまいます。そこで春の修復作業が不可欠となるのですが、この作業はまさに土木作業であり、



本木中平地区の棚田

大変な重労働です。かつては50戸以上あった受益農家も今では13戸にまで減り、高齢化も限界近くにまで進んでいます。残された農家の労働負担は数倍になり、そのことがまた稲作放棄・水利組合離脱を加速させるという悪循環が生じているのです。

そこで、この田んぼの生命線である堰の維持管理労力の軽減をはかることが、棚田保存にとっての死活問題になっているわけです。

田植えや稲刈が華やかな表舞台だとすれば、山中での堰浚いはいわゆる3Kの裏仕事。はじめはどれだけの人が来てくれるのか不安もありましたが、ありがたいことに7人から出発したボランティアも今では毎回4、50人の方が来てくれるようになりました。多くの人に本木・早稲谷地域の堰と棚田と森の織り成す自然景観に魅力を感じてもらっていることの証でしょう。そしてこの活動をつうじて、外からは見えにくい中山間地域における稲作の本当の苦勞への理解も確実に広がっていると感じています。

本木上堰は江戸時代中期1736年（元文元年）に会津藩士の指揮のもと本木・早稲谷の村人が総出で12年の難工のすえ完成し、幾多の災害をのりこえて守られてきたもので、随所に開削当時の姿を残す歴史的文化遺産としても貴重なものです。2011年3月には福島県によって特に後世に伝えたいふくしまの水文化のひとつに選定されました。この堰を“生きたまま”保全していくこと自体の意義も大きいのです。



田植えを終えたどじょう地区の棚田

棚田学会通信 第40号 2013年6月20日発行

発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagattukai@yahoo.co.jp